

日韓音声対照における一考察

—日本語教育の観点から—

名嶋 義直

キーワード： 音韻体系 弁別素性 音声教育 発音矯正 演繹的教授法

0. はじめに

本稿ではいわゆる朝鮮族母語である朝鮮語と同等の意味で韓国語という用語を使用する。朝鮮語という用語を使用しないのは筆者が大韓民国人（以下、韓国人）にしか日本語を教えたことがないこと、参考文献の執筆者が韓国人であること、参考文献の中に大韓民国で出版されたものがあることによる。なお引用文献における使用はその限りではない。

1. 日本語の音声に関する韓国人の認識

現在、最も日本語学習熱の高い国の一つとして大韓民国（以下韓国）が挙げられる。また世界の言語の中で日本語に構文的に最も近似性の高い言語の一つとして韓国語が挙げられる。その近似性から日本語を学習する韓国人は「日本語は簡単だ」と考える傾向があるように思われる。許(1991)は日本語を学習している韓国の大学生への質問紙調査を通じて日本語学習者の意識調査を行なったものである。それによると、回答者の70%以上が日本語について「思ったより難しい」と回答している。これは学習を開始する前は日本語を簡単だと考えていたことを意味する。一方、「日本語は一般にやさしいと思われるが、どういうところがやさしいと思いますか」という質問に対して、30%弱の回答者が日本語の音声がやさしいと回答している。別の質問紙調査がある。伊勢田・生越・岡野・助川(1991)は韓国の韓国人日本語教師に対して行なった質問紙調査の結果をまとめたものである。それによると日本語の音声教育について、50%以上の回答者が「困ることが多い」、10%以上が「自信がない」と回答している。

この2つの質問紙調査の結果は非常に対照的であつ重要な問題を提起していると言える。学習者は日本語の音声を簡単だと見なしているが、教師の側は非常に難しいと考えているのである。正反対の見解であるがどちらが正しいのであろうか。韓国語を学習し、また、韓国人に日本語を教えた経験から判断すると韓国人にとって日本語の音声は難しいものであると言える。

そこで、本稿では日韓音声対照研究として両語の音声について類似点よりも相違点を中心に概観し、韓国人日本語学習者にとって注意すべき点を挙げ、従来の

「音に慣れる」のを待つ音声教育ではなく、対照研究の成果をふまえた「説明する音声教育」を再提案したい。音声面での教育についてはアクセント・イントネーションなども重要な点であるが、本稿では音素・音声に関する音韻レベルを中心に考察を行なうこととする。

2. 日韓母音対照

日本語は母音の数が5つ、半母音の数が2つとされる。一方、韓国語は母音が6つ、半母音が2つであるが、複合母音のうち3つが短母音扱いされているので全部で11になる。音声記号で表記すると日本語のそれは [i] [e] [ɛ] [o] [ɔ] [ɯ] [ɨ] [ɯ̹]、韓国語のそれは [i] [e] [ɛ] [ɔ] [o] [ɔ] [o] [ɯ] [ɯ̹] [i] [ɨ] [ɯ̹] である。ただし韓国語の [e] と [ɛ] と [ɛ] の区別は若年層ではほとんど意識されなくなっている¹⁾。一見すると、日本語のほうが韓国語よりも母音の数が少なく、簡単に思えるが必ずしもそうではない。日本語の母音体系から見ると、韓国語の [e] [ɛ] [ɛ] は日本語の [e] に、[ɔ] [o] は [o] に、[ɯ] [ɯ̹] は [ɯ] に対応すると言える。しかし、それは両者が同一の音として聞かれると言うことではない。梅田(1982)は韓国語の母音体系と日本語の母音体系を比較し、韓国語は顎の閉・非開非閉・開の3段階に対してそれぞれ前舌・中舌・後舌母音が存在し、合計9つの母音が「ほぼ完全な」体系を有しているのに対し、日本語の場合は5つの母音で構成されるため1つの母音の「実現範囲がやや広まる」と指摘した。これに対して、韓国語学習者は日本語の母音を細分化して聞くことになる。日本語で [e] を当てる場合に韓国語学習者が [ɛ] や [ɛ] を当てる場合が出てくるということである。韓国語学習者が日本語の [e] [o] [ɯ] を母語の体系に置き換えて聞き取ったり発音したりする傾向があるのは両者の母音体系の違いが起因していると言える。聞き取りは別として、音声を発音する場合は意味は通じるものの不自然な日本語という印象を与えてしまう危険性がある。

では、如何にして日本語の母音を習得させれば良いであろうか。まず、日本語においては [e] と [ɛ] と [ɛ]、[ɔ] と [o]、[ɯ] と [ɯ̹]、それぞれの組において意味の区別がないことを説明する。そしてその後で優れたモデルに接し、発音する機会を多く持つことが大切であろう。日本語の [e] [o] [ɯ] は決して発音に困難を伴う音声ではない。次節に述べる子音の問題に比して母音の習得は相対的にはそれほど困難ではないと思われる。外国語を学習する際のストラテジーとして学習者は母国語の体系の中で最も類似しているものを援用しがちである。教師は学習者の母語と日本語の類似性を常に意識し、学習者の音声に注意すべきである。

3. 日韓子音の弁別素性対照

3. 1. 弁別素性の対照

日韓両語の音素体系における大きな違いはその弁別素性の違いである。対立する音素の区別をどのような特徴でもって行なうかということである。本節では特に特徴的な閉鎖音・破擦音を中心にその違いを考察する。韻律も弁別素性となりうるが、ここでは考察対象外とする。日本語の閉鎖音・破擦音においては声帯の振動を伴わない無声音と振動を伴う有声音とが音素として対立している。/p/は無声音として、/b/は有声音として理解され別の音素として捉えられる。音素は、「意味の区別を担う音の最少単位」である。故に、/p/と/b/は日本人の耳には異なる意味で理解される。[paN]と[baN]は‘パン’と‘番’の如く全く違う語として聞き取られるのである。一方、韓国語の閉鎖音・破擦音においては日本語の弁別素性である有聲/無聲の対立は意味の区別に関与しない。[paN]と[baN]は同じ語として理解されうる。一方、韓国語におけるこの対立音素間の弁別素性は発音時の気音排出の有無、声門閉鎖の有無に求められる。気音の排出を伴うものを有気音（韓国語では激音）と言ひ、伴わないものを無気音（韓国語では平音）と言う。声門の閉鎖を伴うものを声門音（韓国語では濃音）と言う。韓国語では[pəN]、[pʰəN]、[pʰəN]はそれぞれ違った意味を持つ²⁾。/p/、/pʰ/、/pʰ/の三項対立である。なお、継続音である摩擦音/s/については調音法の性格ゆえに有気音は存在せず/s/と/s'/の2項対立となる。

総括すると、閉鎖音・破擦音に関して、日本語では有聲/無聲という二項対立をなし、韓国語では無気/有気/声門閉鎖の三項対立をなしている。摩擦音に関しては日本語は閉鎖音・破擦音と同じく有聲/無聲の二項対立をなすのに対し、韓国語では無気/声門閉鎖の二項対立をなす。なお、梅田(1982)には「韓国語の子音が長く強く発音されるのに対し、日本語の子音は極めて短かく且つ弱い」という指摘がある。発音及び聞き取りの両面において問題になる重要な指摘である。

韓国語の閉鎖音・破擦音の弁別素性対立に関して触れておかなければならない特徴がある。それは無気音（平音）の有聲音化である。韓国語では母音または鼻音には含まれた/s/以外の無気閉鎖音・無気破擦音は有聲音化するという規則がある。例えば[pə]と[pə]を連続して発音すると[pəpə]となる。しかし、音素記号で表記すると/pəpə/である。有聲/無聲という特徴が弁別素性ではない韓国語において、有聲閉鎖音・有聲破擦音は平音が有聲音間に存在する場合にのみ現れる異音として存在している。後節で触れるが、この特徴は韓国人学習者の日本語発音に好ましくない影響を与える。一方、発音矯正に利用することもできるものである。

3. 2. 弁別素性の違いにおける問題点

前節で日本語と韓国語は閉鎖音・破擦音において異なる音素弁別体系を持っていることを確認した。ある子音を聞いたとき、日本人は有声音か無声音かという点を無意識に聞き取るのに対して、韓国人は有気音か無気音か声門閉鎖音かという点を無意識のうちに聞き取る。つまり、日本人にとって気音排出の有無は何ら考慮されていないことを意味し、韓国人にとっては声帯の振動を伴っているか否かということは意味の区別には関係ないこととして考慮されていないことを意味する。聞き取りだけでなく発音の際も同じである。人間は発音に際して自分の音声を自分でモニターしチェックしている。その際の基準となるもののひとつが弁別素性なのである。したがって、この弁別素性の違いは発音に関しても影響を及ぼす。本稿の考察外ではあるが当然表記にも影響する。すでに明らかなように日本語話者は韓国語の弁別素性を不必要なものとして無視し、韓国語話者は日本語の弁別素性を不必要なものとして無視していると言える。ここに大きな問題点が存在する。互いに相手の言語の弁別素性を意識していないのである。このような状態を放置しては正確な発音も正確な聞き取りも不可能である。そこで次節では韓国人日本語学習者にとって実際にどのような場合に問題になるかを状況に応じて考える。韓国語における平音の有声音化現象の影響を合わせ考えるため語頭と語中の2環境に分け、以下に記す閉鎖音を例に考察する。特に例を挙げないが、破擦音についても基本的な同様の問題点が存在する。

3. 2. 1. 有聲閉鎖音

語頭に有聲閉鎖音が立つ場合、韓国人学習者には発音が困難になる。韓国語において有聲閉鎖音は無気音の異音として存在しており、母音または鼻音にはさまれた場合のみ生ずるものであり、語頭に立つことはないからである。したがって、‘学校’ [gokko:] という発音が日本人には [kokko:] と聞こえる事態が生じる結果となる³⁾。語中の有聲閉鎖音の発音は一般的にそれほど問題にはならないと思われる。原則的に日本語は音節が母音で終わる開音節言語であるため子音は必ず母音または鼻音にはさまれて存在する。子音が連続することはない⁴⁾。この環境は韓国語における有聲音化の発生環境と一致する。したがって、語中の有聲閉鎖音の発音については韓国語における有聲音化現象を対応させれば良いことになる。韓国語における有聲音化は無気音（平音）の場合にのみ起こり、有気音や声門音の場合は起こらない。つまり韓国人学習者が語中の有聲音を有気音や声門閉鎖音でもって発音した場合は有聲音化されない。それは別の音素を用いたということであり、日本語として意味が変わり通じないということが起こりうる。たとえ通じても日本語の無声閉鎖音と韓国語の有気閉鎖音や声門閉鎖音とはその聞こえ方

に違いがあるので日本語らしくない、言い換えると外国人らしい発音になってしまう可能性が大きい。この点は学習上、注意を払うべきである。ただ傾向として日本語の無声音を韓国語学習者は平音に置き換えて発音するようである⁵⁾。

3. 2. 2. 無声閉鎖音

次に無声閉鎖音について同じく語頭と語中に分けて考える。語頭に位置する有声音の場合に比して、それほど問題点はないと言える。しかし、注意すべき点はある。先述の如く、韓国語では有聲／無声の対立は意味の区別を担わず、無気／有気／声門閉鎖の対立が意味の区別を担う。ところが韓国語の弁別素性三項は日本語母語話者にとっては意味の違いをもたらさない。実際、[p^h] [p'] という音は日本語の中にも存在している。例えば「パーッと行きましょう」と元気よく言う場合の‘パーッ’は [p^h] である場合が多いであろうし、「ビール、一杯下さい」という場合の‘いっぱい’の‘ば’は [p'] に近いと言えよう。しかし、[p^h] や [p'] は [p] としか認識されない。故に韓国語学習者の [p] [p^h] [p'] は日本人には全て [p] として理解される。しかし、それは韓国語話者の発音する [p] の発音が日本語として適格であることを必ずしも意味しない。日本語の無声音と韓国語の有気音や声門閉鎖音とはその聞こえ方に違いがある。日本語らしくない、言い換えると外国人らしい発音となる原因の一つがここにある。

これに対し、語中における無声閉鎖音の発音は問題が大きい。その原因は語中における有聲閉鎖音の発音が比較的容易なことと相対的関係にある。日本語音声の習得において、平音の有声音化現象は一方ではプラスに働き、他方ではマイナスに作用する。原則的に日本語は開音節言語であるため語中の子音は母音、つまり有声音にはさまれた形で存在する。よって韓国語学習者はこれを無声音ではなく有声音で発音する傾向がある。‘韓国’ [kəŋkoku] を [kəŋŋoku] と発音する。学習者が無声音を意識するあまり平音ではなく激音（有気音）や濃音（声門閉鎖音）で代用すると、一応は無声音として聞こえる。しかし、非常に強く聞こえたり、固いぎくしゃくした日本語になり、日本語らしさに欠けるという問題点が残る。梅田 (1982) も無声閉鎖音の代替としての濃音使用に疑問を呈し、「促音に聞こえたり」するマイナス面をいくつか指摘している。注意が必要である。

3. 2. 3. 弁別素性の違いにおける問題点の解決策

韓国語学習者に対する音声教育上、特に問題と言える語頭の有聲閉鎖音・有聲破擦音と語中の無声閉鎖音・無声破擦音の発音について日本語教育の立場から解決策を考える。学習者は成人と仮定する。

最も重要なことは学習者自身の意識づけである。いくら優れたモデル発音を聞

けどもそれを日本語の音声として捉えなければ効果的ではない。日本語の [b] は /p/ の異音ではないという理解が必要である。意識づけの一手段として音声教育の初期段階で日本語における有声／無声の区別がいかに大切か、日本語においては韓国語の激音・濃音は韓国語平音の同類として聞き取られ意味の区別を持たないことを強く意識させるべきであろう。この説明は韓国語でなされて良い。文章による説明も効果的と思われる。日本語音声の基礎知識なくして効果ある音声教育は望めない。この「説明」の重要性はすでに水谷(1974)で強調されているが、実際、どの程度実行されているかどうか疑問である。この事前説明の後、モデルを聞かせれば、学習者はその違いに注意して聞き効果的であろう。モデルを聞かせ、音に慣れるのを待っている消極的な教授姿勢では効果的な音声教育は望めない。発音練習する場合は語頭で有声音が、語中で無声音が発音しやすい環境を作って行なえば良い。[gakko:]の[g]の前に便宜上、有声音を置いて発音させる方法をとる。例えば[ʃo:gakko:]⁶⁾、‘私の[gakko:]’の如くである。有声音が確実に発音できるようになった後、[gakko:]の発音練習を行なう。この場合、いきなり[gakko:]を発音させるのではなく[ʃo:]や‘私の’を声に出さず頭の中で発音し[gakko:]を発音するという過程を経たほうがスムーズに発音できると思われる。そして徐々に語頭で有声音を発音させる。語中の無声音の場合も手順は同様である。‘かんこく(韓国)’と発音させる。[kaggokkə]と聞こえたら、「あなたの発音では韓国ではなくて監獄の意味になりますよ」と示す。それが学習者の有声／無声の区別に対する意識づけを強化する。鼻音を用いても同じ環境を設定することが出来るが⁷⁾、梅田(1982, 1984)では語頭鼻音の破裂音化による鼻音と有声音との混同の危険性が指摘されている。注意が必要である。

語中で無声音を発音する環境を作るのは語頭で有声音が発音される環境を作るより困難である。まず、[kəŋkəkə]を[kəŋ]と[kəkə]に分けて発音する方法が考えられるが、一語を分割することはなるべく避けたほうが良い。明確に分割すると一単語の発話リズムが崩れ、変な癖を付ける結果になりかねない。最初は心持ちポーズを置く形で無声音を発音させるようにするべきであろう。そして徐々に自然なリズムで語中の無声音が発音できるように進めていくのが一つの方法であろう。今田(1981)では語中の無声音を一旦、有気音で発音し有声音でないことを認識させ、徐々に気音の排出を弱めていく方法や声帯の振動を自分で確認することによる意識づけの例が挙げられている。また、濃音で代用させる方法も考えられる。両者には閉鎖という調音法、無気音という点では共通点がある。しかし、聞き取りにおける日本語としての不自然さという点から考えると認めないほうが好ましい。また、土岐(1989)では「身体の緊張と弛緩」を有声音・無声音を含めた音声の矯正法として利用する方法が説かれている。

なお、発音練習をする際に有意味的な音声連続体を用いるか否かという問題がある。筆者の経験から言えば、有意味的なもののほうが好ましいと考える。学習者の興味を引き、語彙教育になるからである。意欲的な学習者ほど学習することに喜びや楽しさを見だし学習動機を強化していくものである。たとえ発音練習とはいえ無意味的な音声の連続を繰り返し発話させることは避けたほうが良いであろう。

4. 日韓子音対照各論

4. 1. /z/ と /c/

日本語において/z/は/s/と対立する。韓国語においては /s/は/s' /と対立する。/z/は韓国語に音素として存在しない。(梅田(1982)、ソウル大学校語学研究所(1988).) ただし [ʒ] と [dʒ] は/c/の異音として存在する。母語にない音素を発音することが如何に困難かは想像に難くない。日本語学習歴の長い韓国人学習者でも /z/の発音は難しいと思われる。韓国人らしい日本語の特徴の一つである。許(1991)によると韓国語話者は日本語の/z/の後ろに来る/a/・/u/・/o/と「jə/・/jə/・/jə/と区別して発音しようという意識があまりない」とのことである。

もう1つの問題は/c/である。日韓両言語とも /l/や/c/は音素として存在しているが韓国語には日本語にある破擦音 [lʃ] がない。そこで韓国人学習者は日本語の [lʃ] を発音する場合、[l' ʃ]、または [s' ʃ] を用いることが多い。梅田(1984)には「多くはsʃ でまねしている」との記述がある。平音ではなく濃音を用いるのは有声音化の規則が適用を回避するためと考えられる。母語に音素がないため代用が行なわれ、結果として日本語らしくない発音になる。

如何にこの問題点を解決すれば良いか。韓国語の場合、/c/ が有声音化すると [ʒ] で発音されることが多い⁹⁾。したがって、韓国人学習者は /z/を発音する際、母語で最も近い [ʒ] (または [dʒ]) を当てることが多い。調音点が硬口蓋寄りに移動し口蓋化現象が発生する。ところが日本語の音素体系では/z/、/ʒ/、/dʒ/、/dʒ/ は別音素である。よって [ʒ] と [dʒ] で代用すると意味が変化したり、理解できない日本語になる。[ʒ] と [dʒ] は発音できるのであるから調音点を少し前方にずらせば良い。これは理論上の話であり、実際の教育現場では簡単に指導・矯正できることではない。口腔断面図を書き、調音点の手がかりを示すことも時として効果がある。また、学習者が日本語以外の言語で調音が可能ならば、それを日本語に応用できる。個人差もあり、やや時間がかかる困難な問題であるが、適切な指導と学習者の自覚と努力により、かなりの程度まで習得できると思われる⁹⁾。[lʃ] についても習得のストラテジーは同様である。[l']を口蓋化しないよう注意し、徐々に [lʃ] に近づけていくことが一つの方法である。梅田(1984)で

は [ssu] から [lsu] への移行が提案されている。土岐 (1989) では [u] を発音する形つまり歯茎や歯が見える形にすることが口蓋化の「予防策」になるとしている。しかし、実行すると分かるが、実際はこの形でも舌が動かせるため口蓋化が発生する可能性がある。そこで舌先を歯茎に接面させる。すると、かなり [ls], [dz] に近い音が出せる。この形で練習し、しかる後に調音点を少し後退させるようにすれば良いであろう。

4. 2. 鼻音 - 撥音の問題 -

4. 2. 1. 日本語の撥音と韓国語の鼻音

日本語の撥音は音声記号で表記すると [ɱ] [ɱ] [ŋ] [N] [̃] などで表わされる。[p, b, m] の前では [ɱ], [l, d, n, l], [s, dʒ, dz] の前では [ɱ], [k, g] の前では [ŋ], 語末の場合は [N] で発音される。また母音の前の撥音は鼻母音化 [̃] する。摩擦音の前の撥音は鼻母音化する場合と鼻音化した摩擦音になる場合がある。日本語の撥音は様々な音声で表現されるが、これらは無秩序に使用されるのではなくその環境によって現れうる音声が決定的である。つまり日本語の撥音は /N/ の異音であり相補分布をなしているわけである。ところが、韓国語の場合は状況が異なる。韓国語にも [ɱ] [ɱ] [ŋ] の音声が存在する。しかし、韓国語の場合はそれぞれが独立している。音素として /ɱ/ /ɱ/ /ŋ/ が存在する。平易な表現をとれば、日本語には5または6種類の‘ん’があり、音声学的には同一のものではないが、すべて同じ意味を表している。一方、韓国語の場合は我々日本人にとって日本語の‘ん’に聞こえる音が音声学的に見て3種類あり、それらは意味の区別を受けるということである。

4. 2. 2. 撥音における問題点とその解決策

韓国人学習者が日本語の撥音に関してどのような問題点を持っているかを聴解面と発音面に分けて考察する。まず、聴解の際の問題点である。韓国人学習者は日本語母語話者が /N/ の異音として意識的な聞き分けをしていない数種類の撥音を区別して聞き取ってしまい混乱する場合が考えられる。韓国語では [ɱ] [ɱ] [ŋ] を聞き分ける必要があるため日本語の聴解でも同様の姿勢で対応する。これに対し、発音面では次の問題点がある。日本語では撥音の次に発音される音声により、/N/ のどの異音を使用するかが決定される。韓国語にはそのような規則はない。しかし、日本語の場合も /N/ の異音は相補的分布をなしており、単語レベルでどの異音を使用するのかを記憶することは可能である。ところが、それを困難にしているのが表記の問題である。韓国語は [ɱ] [ɱ] [ŋ] を表記の上でも区別するが、日本語の /N/ の異音は全て ‘ん’ ‘ン’ で表記される。表記上は区別がないため

単語を記憶する際や読む際にどの異音で発音するかを知る手がかりとはならない。そのためか韓国学習者は日本語の/N/ を発音する際に常に特定の音で全てを代用してしまう傾向があるように思われる¹⁰⁾。相補分布の条件に合致しない場合は不自然な発音となる。

次に問題解決の方策を考えてみたい。重要なことは音声学習に入る前に日本語の/N/ について解説をしておくことである。それだけで学習者の聴解時における混乱はかなり防げるであろう。発音面に関しては学習者の学習目的にもよるが、一般的には異音の使い分けができるように指導するべきであろう。そのためには良いモデルを聞かせることも大切であるが、学習者が発した撥音がどの異音に当たるのかを教師が確実に聞き分け、適切な指摘・矯正・指導をする必要がある。日本語母語話者は普段意識していないだけに困難だが、指導する側にはそれが求められる。場合によっては相補分布の規則を示すことも一対策である。ソウル大学校語学研究所(1988)は対照分析学術書であり、日本語学習書ではないがその記述がある。理解の一助となろう。

4. 3. その他の子音における考察

4. 3. 1. [r] と [l]

[r]と[l]について若干の問題点を記す。日本語の「ら行」に対応する音素は韓国語においては /l/ である。ただし/l/は[r]と[l]の異音を持つ。具体的には音節末子音の/l/が [l] と発音される。また韓国語では外来語などの特殊な場合を除いて語頭に[r]が来ることはない¹¹⁾。その場合、通常[r]は[i]や[u]へと置換される。例えば、李という姓は韓国では [i]と発音される。しかし、この事実は韓国人が日本語の語頭の「ら行」が発音できないということの意味するものではない。韓国人学習者が日本語学習の初期段階において「ら行」で始まる語を発音する際、[r]の脱落や、[u]への置換が観察されることがある。その場合は[r]が語中にある環境を作り発音練習をすれば良い。また韓国語の[l]は音節末子音では反り舌音で発音されるので(梅田(1982))、何らかの特殊な意味合い(粗雑さ、怒りなど)でもって聞き取られるおそれがある。指導上、注意が必要である。舌を巻かず、歯茎を軽く弾く感覚を身につけるよう指導する必要がある。

4. 3. 2. /b/

韓国語の /b/はかなり弱体化して発音されることが多い。日本語にもそのような傾向があり[b]が有声音化して[haba] (母)が[haba]のように発音される場合があるが、この傾向は韓国語のほうが強い。したがって、不必要な[b]の有声音化や脱落に注意しなければならない。なお梅田(1982)では韓国語には日本語にあ

る「[θ] [ç]という変異音はな」となっているが、ソウル大学校語学研究所(1988)ではそれら2音声が存在するとの記述がある。どちらにしても[θ] [ç]の発音は日本語の特徴である。指導の際も注意が必要である。

5. 特殊拍についての考察

5. 1. 促音

韓国人学習者の促音に関しては以前から問題が指摘されているが、それはおもに拍の観点からの指摘であった。本節では音声学的観点から韓国人学習者の促音について考える。日本語の促音は音声記号で表記すると以下の形式をとる。‘学校’という語句は[gakko:]、‘一冊’は[issai]sa、‘一本’は[ippoN]となる。日本語の促音は次に位置する子音のみを発音していると考えることができる。それは音節が子音で終わっていることを意味する。音節が子音で終わる形態は韓国語の音節末子音と同形態である。したがって、調音自体にそれほど困難は伴わないであろう。しかし、日本語の促音は次に位置する子音により、複数の異音が存在する。これらの促音を含んだ語句を韓国人学習者が頭の中でハングルに置き換えたり実際にハングルで表記する際には全て [l] で置き換える傾向にある¹²⁾。したがって、発音の際にも全て [l] を使用することが考えられる。

促音の問題についても、まず、学習者が日本語の促音の音声学的性格を正しく理解することが必要であろう。促音の発音自体はそれほど困難であるとは思えないが、単独の音素で全ての発音を発音しないよう注意が必要である。韓国語の声門音(濃音)は声門閉鎖を伴うため語中では促音に近い音として日本人の耳には聞こえる。(前述の梅田(1982)参照。)そこで濃音を促音の代用として選択することも考えられる。濃音の音素は5種類あるので矯正に利用できる。その後、拍の問題となる。既に言及されているが、韓国語では音節末子音を含めて一音節とするのに対し、促音はそれ自体で一拍に近い長さが必要となる点が異なる。注意して指導すべきである。

5. 2. 長音

韓国語でも長音は存在し意味の弁別機能を担う。しかし、それらは限られた単語についてのみ言えることであり、また近年は長・短の区別もほとんど意識されなくなってきた¹³⁾。摩擦音などの持続音は長音で発音すること自体簡単である¹⁴⁾。したがって、日本語学習における長音の調音それ自体はさほど問題はないと思われる。韓国語学習者に限らず、日本語学習者における長音の脱落がよく指摘されるが、問題は拍感覚の習得ということになる。(梅田(1984)、前川(1997)。)したがって、本稿ではこれ以上の考察は行なわない。

6. 結論

以上皮相的・部分的ではあるが韓国人学習者を対象とした音声教育上の問題点について音声学的観点（特に調音音声学）から考察し、日本語教育的観点から問題解決の方策について検討してきた。最後に2つの再提言を行なう。

第1は日本語教師に対してである。日本語教師は学習者の母語の音声体系について必要最小限の知識を持っているべきである。多国籍クラスでの授業が一般的な日本語教育の現場において、一人の教師が全学習者の母語の音韻体系について専門的知識を有することは現実的ではないが、各教師が自分の興味ある言語の音声についてある程度の知識を持つことはそれほど非現実的ではない。しかし、以前から提唱されているにも関わらず、実際の現場ではそこまで求められていないのが実状である。筆者の体験から考えても日本語以外の言語の音声学的知識をある程度持つ日本語教師は持たない教師の数に比してそれほど多くない。これからの日本語教師は最低一言語の音声体系については基礎的知識を持つておくべきである。複数言語の知識が持てればその方が望ましいことは言うまでもない。

第2は教授法に関してである。あくまで成人の学習者を対象に限ってであるが、音声習得過程において理論を説明する認知的学習法を検討する余地があると考えられる。常に必要だとは断言出来ないが、発音に困難を感ずる場合や矯正が功を奏さない場合など状況によっては効果的であると考えられる。音声という学習事項は帰納的に習得するよりも演繹的に学習したほうが時間も節約でき、効果が上がる可能性がある¹⁶⁾。最初に示した韓国人学習者と韓国人日本語教師との日本語の音声に対する認識のずれはこの教授法にも原因があると考えられることも出来る。帰納的に学習する学習者と演繹的に学習した教師の間には学習者と教師という立場の差を考慮してもやはり認識の程度に差が生じるのではないだろうか。ただし、学習者全員に専門的な知識を身に付ける必要があるとは限らない。したがって、説明のレベルを考慮しなければならぬことは言うまでもない。これは日本語の音声学的知識を少し得た後、それと比較する手法によって韓国語を学んだ筆者の実体験と日本語学校で日本語を教えてきたわずかな経験からも言えることである。以上2つの再提言をもって本稿の結論とする。

註

- 1) 梅田(1982:32)に「非年長の世代の発音には」/ə/が区別されなくなっているとの記述がある。留学生に質問したところ、「区別がない」とのことであった。/e/と/i/の区別も薄れ同音異義語の問題が増えたそうである。
- 2) 本稿では印刷の都合上、有気音を[ʰ]、声門閉鎖音を[ʔ]で表記する。
- 3) この問題には学習者の発話レベルの問題と聞き手である日本人の聴解レベルの問題が複雑に絡み合っている。また音声の認知・処理過程の問題でもある。日本人の発話と学習者の聴解の間にも当然、同問題が生じる。詳しくは水谷(1974)「音声教育の問題点(1)」を参照のこと。
- 4) いわゆる母音の無声化が発生した場合や促音・撥音の発音の際は子音が連続する形になるが、本稿ではそれらについては考察対象外とする。
- 5) 詳しくは梅田(1984:50)にこの点についての記述があるので参照のこと。なお梅田の用いる「清音」は本稿での無声音に、「濁音」は有声音に対応する。「有声・無声と清濁の区別を混同すること」の弊害は先述の水谷(1974)「音声教育の問題点(1)」に記述がある。一言で言えば、「清濁の対立は日本語の音韻の規則性とは違った概念であるから、日本語の音声現象を正確にあらわすことにはならない」となる。
- 6) 本稿では印刷の都合上「し」「じ」「ち」「ぢ」の音声表記をそれぞれ [ʃi] [ʒi] [tʃi] [dʒi] の形で表記する。また、「ず」「づ」については [dʒu] を用いる。
- 7) 梅田(1984:50)に「捷解新語などのハングルによる日本語発音表記には濁音を濁音を鼻音を表す字を添記して表している場合がある」とことや「韓国の日本語の先生の中には早くから鼻音を添えて発音させ慣れてきたら鼻音をとる」方法をとっている教師がいるとの記述がある。
- 8) 韓国人留学生を対象に簡単な聞き取り調査を行なったところ、極端に明確に発音する場合を除いて [ʒ] で発音する傾向が認められた。
- 9) 卑俗な例であるが、日本での歌手生活が長い桂銀淑氏はその歌の中で [lʒ] をかなり自然に発音している。一方、最近日本でデビューしたグループは完全に [li] と発音している。日本語らしい発音に対する両者の意識の差はかなりあると思われるが、[lʒ] の習得には時間がかかる一例であろう。
- 10) 『日本語教育辞典』(1982:25)の発音についての記述の中で同様のことが述べられている。[ŋ] は [n] や [m] に比べて両唇や舌を積極的に使用しないので調音上、経済的という理由も関係すると思われる。
- 11) この問題は漢字を用いて表記できる語かどうかということも関係する。ま

た朝鮮民主主義人民共和国においてはこの限りではない。つまり語頭に [r] が立ちうる。李さんは [ri] さんと発音される。

- 12) 森田 (1983:99) に日本語の促音を「韓国文教部案では「l」で表示するよう定められている」との記述がある。韓国文教部とは日本の文部省にあたる。
※ 森田 (1983) は韓国語 (漢字・ハングル表記) で書かれており、引用文は筆者が日本語に訳しハングルの音声記号に置き換えたものである。
- 13) 複数の留学生に質問したところ、長音における単語の区別はいくつかの限られた単語にしかなく、それらの区別も徐々の薄れつつあるとのことであった。またそれらの単語はほとんどが1音節の語である。泉 (1998) にも第2音節以降は長・短の区別がないとの記述がある。
- 14) ある韓国人留学生は長音を発音することそれ自体は難しくないが、発音しなければならない時に発音するのは非常に難しいし、聞き取りも難しいと語った。また、表記上の事象であり直接音声の問題には関係しないが、日本語の片仮名における長音符号「ー」は韓国でも同様の意味で広告・雑誌等で使用されることがあり、特に会話表現に多く見受けられる。従って長音それ自体は特別なものではないと考えて良いであろう。
- 15) 水谷 (1982:10) によると、日本語学習者は「学習開始第一限からいきなり表出作業を中心とする教育活動に入って」おり、「フィードバックによる自己の音声聴取能力は不完全なままに放置されたままになる危険性を伴う」と述べている。母語習得過程においては自らの聴取活動の蓄積と分析の結果、フィードバック能力を獲得するが、第二言語習得過程の初期段階ではそれを期待することは非現実的である。その不完全なフィードバック能力を補完するものとして音声体系知識の提示が重要と考えられるのである。今田 (1981) でもガ行鼻音が相補分布をなす異音である点を最初に告知することの必要性や指導・矯正の一環として、「発音のメカニズム」に関する説明の必要性が述べられている。

参考文献

- 泉 文明(1998) 「日本語とコリア語」 玉村文郎編『新しい日本語研究を学ぶ人のために』 世界思想社 京都: pp. 169-190.
- 伊勢田涼子・生越直樹・岡野ひさの・助川泰彦 (1991) 「韓国における高校の日本語教師の背景と直面している問題点 -1990年度韓国日本語講師研修会のアンケートから-」 『日本語教育』74 日本語教育学会 東京: PP. 123-133.
- 今田滋子(1981) 『教師用日本語教育ハンドブック⑥発音』 国際交流基金 凡人社 東京.
- 梅田博之(1982) 「韓国語と日本語-対照研究の問題点」 『日本語教育』48 日本語教育学会 東京: pp. 31-42.
- (1984) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」 『日本語教育』55 日本語教育学会 東京: PP. 48-58.
- (1993) 「朝鮮語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』 三省堂 東京: pp. 950-980.
- 許 卿姫(1991) 「日本語学習に関する韓国大学生の意識調査研究」 『日本語教育』74 日本語教育学会 東京: PP. 134-149.
- ソウル大学校語学研究所 黄 燦鎮・李 季順・張 奕 鎮・李 吉慶 (1988) 『韓日語対照分析』 明治出版社 ソウル.
- 土岐 哲(1989) 「音声の指導」 寺村秀夫編『講座日本語と日本語教育』13 明治書院 東京: pp. 111-138.
- 村崎恭子(1982) 「音節」 『日本語教育辞典 縮刷版』 大修館書店 東京. pp. 20-26.
- 前川喜久雄(1997) 「日韓音声対照管見」 『日本語と外国語との対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語』下巻 国立国語研究所 東京: pp. 173-190.
- 木谷 修(1974) 「音声教育の問題点(1)」 『日本語教育研究』10 言語文化研究所 東京: pp. 1-5.
- (1982) 「音声教育の問題点」 社団法人日本語教育学会編 『日本語教育辞典』 大修館書店 東京: pp. 9-14.
- 森下晋一・池 謙来(1992) 『日・韓語対照 言語学入門』 白帝社 東京.
- 森田芳夫(1983) 『韓国学生の日本語学習における誤用例』 誠信女子大学校出版部 ソウル. (注記. 原題の漢字ハングル表記を筆者訳)

(姫路獨協大学大学院)